



Face to Face

NO.13

特定非営利活動法人 T I C O

祝！新校舎完成！いよいよ新学級開始！



◆18名で開校したンゴンベ・スクール。8年間の時を経て今ではこんなにたくさんの子供達が学べるようになりました！

関連記事4ページに掲載



Donated by
Mr. Hidano Shuichi
Catholic Ofuna Church
Caritas Junior/Senior High School
Tsurumi Junior High School
Moriyama Elementary School
through **TICO**, Japan
May 2007



今回の新校舎建設にご支援をいただいた皆様
ありがとうございました！

ヒダノ修一さん
大船カトリック教会
カリタス女子中学高等学校
横浜市立鶴見中学校
吉野川市立森山小学校

ンゴンベ新校舎完成！！	1, 4
マラウイHIV対策事業開始	3
職員離着任のあいさつ	3, 4
WAHEプロジェクト・カルプエその後	5

トピック

農村地域保健プロジェクトいよいよ始動	6-7
ザンビア・救急プロジェクト報告	8
カンボジア・新規プロジェクト開始	8
TICOユース設立記念講演開催報告	10

ティコ

TICOは保健・医療・農村開発などの分野を中心にアフリカ・アジアで支援活動を行っているNGO（非政府組織）です。世界の中の日本を考え、それぞれが自分にできる国際協力を実践していくために1993年に任意団体として設立、2004年9月に特定非営利活動法人（NPO法人）となり活動を続けています。

地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々と分かち合い、私たちの生活を振り返るとともに地域の精神文化の高揚に寄与することを目的としています。

バイオエネルギーの危うさ

TICO代表 吉田 修

最近バイオエネルギーが注目されている。石油、石炭などの化石燃料と違い、太陽光エネルギーにより再生され、二酸化炭素の増加に関与しない。温暖化対策の重要な柱と考えられているからである。バイオの利用法も様々である。

- 1) 薪、炭を燃料として使う。
- 2) 間伐材や建築廃材などを燃料にして発電する（北欧などで広く行われている）。
- 3) 間伐材や建築廃材などを化学反応させて燃料となるガスを発生させる。
- 4) サトウキビやビールの絞りかすなどの廃棄物を利用し、アルコールやガスをつくる。
- 5) 生ゴミ、糞尿、汚泥などからメタンをつくる（東南アジアの農家などで普及している）。
- 6) 大麦、とうもろこし、サトウキビなど食糧となるものを原料にアルコールをつくる。

1)～5)については、森林が適正に管理されるなどの条件で、どんどん推進するべきである。今のところ社会のお荷物となっている産業廃棄物を再利用するということで一石二鳥。また、間伐材が有効利用されれば荒れ果てた森林を管理することができ、山の保水力アップ、洪水の危険を減らし、その上、日本の林業が活性化され、わざわざ東南アジアの貴重な熱帯雨林を違法伐採しなくて済む。いい事づくめだ。

しかし、6) はだいぶ質が違う。現在世界では8億5千万人が飢えている。毎日、栄養不足が原因で2万5千人が死亡している。しかもこの数字は毎年増加している。飢えている人がいる以上、食糧を先進国の飽食をむさぼっている人々のためのエネルギーに転換すべきではない。実際にバイオエネルギーが注目されて以後、穀物の値段が2倍になった。最大の被害者は、途上国の貧民街に暮らす人々で、食糧を半分しか買えないということである。貧しい人たちの食糧を奪ったバイオ燃料で自動車を乗り回すのは、金持ちのエゴである。（食糧を家畜の餌にして肉を食べることと似ている）

アマゾンの原生林を伐採してバイオエネルギーのための畑に転換されるようなことが起こっているが、これは地球環境の死期を早めるだけの蛮行、本末転倒である。

ただし、6) にも例外があるかもしれない。日本の休耕田を再び耕してバイオエネルギーを生産するというものである。まだ採算は取れないようであるが、これなら誰にも迷惑はかからない。将来の食糧危機への備えにもなる。

もう一つの側面は、途上国のエネルギー問題である。例えばザンビアの首都ルサカでは200万人のほとんどがバイオエネルギーである炭か薪を使う。それ以外の選択肢は無い。したがって、周辺の森林は急速に伐採され砂漠化に拍車をかけている。早魃の年の農民は、炭焼きをするしか収入を得る方法が無いのも問題を深刻にしている。途上国でエネルギーを確保しつついかに森林を保全するのか、これも地球環境の明暗を分ける非常に重要で困難な問題である。

明白なことは何十兆円もかけて石油略奪のための戦争などしている場合ではないということである。



吉田 修(よしだ おさむ)
自称兼業農家(外科医)
1958年徳島県生まれ
アフリカをはじめ世界各国にて国際医療援助活動を実施。
現在、徳島県山川町の「さくら診療所」で地域医療を実践しながら、代表として「TICO」を運営している。

ザンビアのお隣、マラウイにおけるエイズ対策事業開始

ＴＩＣＯはザンビアでのこれまでの経験を活かして、今年からザンビア国のお隣に位置するマラウイ国においても支援活動を始めることとなりました。マラウイはＴＩＣＯの吉田代表が途上国の医療現場をはじめて体験した国でもあります。

ＴＩＣＯはワールド・ビジョン・ジャパン（ＷＶＪ）と共同でマラウイ国においてエイズ対策として「マラウイにおけるHIV/AIDS検査相談所（VCTセンター）整備計画事業」を２００７年４月から実施しています。

マラウイ国はアフリカの中でもHIV感染率が高く、１５歳から４９歳の全人口の１４％以上がHIVに感染しているといわれています。日本など先進国では、HIVに感染した場合抗ウイルス薬という薬剤を服用することでエイズの発症を抑えることができます。しかし、マラウイでは国家の財政的な困窮より、先進国のようなシステムはありません。しかし、国際機関の支援により、マラウイにも抗ウイルス薬が届くようになりました。

抗ウイルス薬を適切に飲むためにはまず、HIVに感染しているかどうかの検査をする必要があります。しかし、現状では、マラウイの人々が感染の有無を知ることも非常に困難な状況にあります。マラウイでは、VCT（自主的なカウンセリングと検査：Voluntary Counseling and Testing）センターが、検査とカウンセリ

ングを提供していますが、この「VCTセンター」も「適正なトレーニングを受けた専従のスタッフ」も不足しているためです。そこで私たちは国内各所に「VCTセンター」を建設し、必要な機材を整えるとともに、適切なカウンセリングができるスタッフを育てます。また、HIVに感染予防法や感染者へのサポートについて、各地域の人々に理解してもらう活動も同時に行います。

マラウイではHIV感染、エイズの発症によって、これまで５０万人以上の子どもが親を亡くし孤児となっているとされています。ＴＩＣＯとＷＶＪの共同活動はこの厳しい状況を少しでも改善できる糸口になると信じています。



VCTサービスを炎天下で待つ人々 ©World Vision

ザンビア事務所離任とマラウイ着任の挨拶

西口 三千恵

六月に入り、日本は夏に向かって蒸し暑い日が多くなっている頃でしょうか？南半球に位置するマラウイでは、これから徐々に寒くなり、冬を迎えます。

このたび、ワールド・ビジョン・ジャパンとの共同プロジェクトである「マラウイVCT整備計画事業」に従事するため、一年二ヶ月暮らしたザンビアを離れることとなりました。振り返ってみると本当にあっという間で、カルチャーショックを受けることもありましたが、ザンビアの暮らしを少しでも良くしたいという熱意を持った人たちとの活動を通じ、多くを学ばせていただきました。私一人にできることなど限られているとは判りつつも、この一年二ヶ月、私自身が学ばせて

いただいただけでなく、少しでも何か貢献することはできたのだろうか、と、離任後もずっと自問を続けています。今後はザンビアでの経験を活かしつつ、マラウイでのプロジェクトを無事に遂行できるように、がんばりたいと思います。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。



ンゴンベで新校舎の贈呈式が行われました

ンゴンベコミュニティスクールにおいて新校舎の建設が始まったのは、2006年12月下旬。それから5ヵ月半の工事の間、通ってくることも私たち我慢の日が続いていました。それは、工事のため遊び場が狭くなっていたこと、5年生の授業が始まったにもかかわらず、使える教室がなかったからです。みんな、心から新教室の完成を待ちわびていたと思います。

贈呈式には、学校の関係者・教員、生徒、保護者など約260名が参加と、盛大なものとなりました。新校舎建設のために寄付をいただいた方々の名前を記した壁の除幕テープカットを行いました。あいさつの中で、寄付者の名前は伝えられていましたが、寄付者の名前が見えると、改めて大きな拍手が送られました。

短い休憩を挟んで、主な寄付者である和太鼓奏者のヒダノ修一さんのコンサートビデオを放映しました。みな、興味津々でヒダノさんの演奏に見入っていました。

新校舎は3教室あり、2教室はベビークラスに、残り1教室は5年生用に使用される予定です。新し

いトイレもでき、混み合うこともなくなるでしょう。大きな水のタンクも撤去され、遊び場が広くなりました。これからは、

思いきり走り回って遊ぶこともできます。新しい教室に広い遊び場。こどもたちの笑顔が、さらに大きく輝くことでしょう。新しい教室で学ぶこどもたちの姿を、今後も見守りたいと思っています。

この日、地元放送局のMUVI TVの取材を受け、式典の様子がニュースで放映されました。（山本ひとみ）



ザンビア事務所・新スタッフ紹介

山本ひとみさん

“ムリブワンジ?” “ブイノ!”
“マディエラ?” “マニンギ…!!!”

ザンビアの公用語のひとつ、ニャンジャ語でのあいさつ。意味は、「元気?」「元気だよ。」「調子はどう?」「最高だよ…!!!」という感じ。ある人と別れて、同じ日にまた出会ったときも、同じあいさつが交わされる。さっき会ったのに、なんて律儀なんだろう、と思うことたびたび。年上の人を敬う態度、お客様のもてなし方、レディファースト(!!!)などなど、見習わなきゃいけないことがたくさん。一方、時間にルーズ、自分の知らないことでも適当に返事をする、すぐバレるウソをつく、などなど、どうにかならないかしら?とため息をついてしまうこともたくさん。でも、にくめないんだよね、好きだなあザンビアの人々。

人も良いけれど、観光地もけっこうあるんだよね。ジンバブエとの国境沿いにある有名なビクトリア滝、自然に湧き出る温泉、そして野生動物のたくさんいる国立公園。せっかくザンビアにいるんだから、遊びに行かなくっちゃ。タザラ鉄道に乗ってタンザニアへ、バス一本でマラウィへ、歩いて国境を渡ってボツワナへ。うーん、ワクワクしてきた。いつどこに行こうかしら…おっとと、遊ぶことばかり考えてしまった。

改め、はじめまして。ザンビア事務所に新しく赴任した、山本ひとみです。以前、青年海外協力隊員としてザンビアに滞在したこともあり、日常生活はスムーズに始められました。これから、TICOの行っているいろいろなプロジェクトについて、見守り、励まし、話し合い、時には叱咤しながら、調整しすめていきたいと思っています。現地の生の声を、ブログでも報告していきます。白い歯がまぶしい、素敵な笑顔のザンビアの人々。私も彼らに負けられないような笑顔で、元気にやるぞ! よろしくお祈いします。



WAHE プロジェクト通信

TICO ザンビア事務所 西口三千恵

WAHE (ワヘ) とは？

Water(水)、Agriculture(農業)、Health(健康)、Education(教育)の領域をカバーしながら農村の生活水準向上を狙うTICOのプロジェクト。TICOは2002年ザンビア南部州にて飢餓緊急援助を行なったがそこで得た教訓とは「緊急援助の限界」と「飢餓をなくすには農村に根本的対策が必要」との認識だった。いくつかの候補地から安全性や信頼できるパートナーの存在等の観点から支援地域をチベンピとカルブウェに決定した。



ザンビア共和国

Chipembi

中央州チベンピ地区

中央州カルブウェ地区

Karubwe

TICOがカルブウェに関わり始めて、すでに二年半以上が過ぎました。壊れた井戸の修理から始まり、ついには灌漑設備まで持つ立派な菜園に成長しました。天水頼みの農業が主流と言うよりもほとんどそれしか選択肢がない小規模農民たちにとって、乾期でも農業ができるということは大きな強みなのではないか。これからはここまで育てた畑を使って、どんどん野菜の生産を！と手放しで喜ぶには、まだまだ時間がかりそうです。

現在カルブウェは、大きな節目に立っているといえます。灌漑設備も整い、農業に関する勉強も一年間続け、いよいよ自立に向けて歩き始めなくてはならない時期にきました。今まで、ミーティングやワークショップへの参加を促すために、TICOからは昼食の支援を続けてきました。また、種や肥料など、運営が軌道に乗るまでは捻出が困難なものを資金面でサポートしてきました。しかし、菜園の存在が周囲に認識され、近隣の住民が野菜を買いに来るなど売り上げも波に乗ってきた昨年後半より、TICOからの資金援助を徐々に引き、共同菜園の売り上げから管理運営費用を出す方向へ移行し始めました。しかし、この過程においてメンバーたちの菜園への関わりにも微妙な変化が現れてきました。

援助がある間は参加するけれども、身銭を切らなくてはならないなら来ない、という態度を示す参加者は、残念ながらどこにでもあります。どこまで支援する

戻ってきたメンバーによって農園はここまで回復しました！



のか？いつ身を引くのか？という問題は、援助する側にとって非常に難しくそして重要な課題です。

TICOが資金援助を減らし始めた頃から、「OOが買えないからできない」と言い出したり、利益分配の時しか来ないメンバーが出勤めたりといった問題が出てきました。一時は協働体制がほとんど機能しなくなり、その時期が運悪く雨期の始まり(＝農繁期)と重なってしまったために、うまくいかない共同菜園を放置して各々が自宅の畑作業に没頭し、共同菜園が草むらと化した時期がありました。しかしその後、一部のメンバーが共同菜園に戻り、再び畑を耕し始めました。種も肥料も、自分たちで購入し、ミーティングも自主的に集まり、活動を続けています。

一人ひとりのメンバーは、ザンビアの一般的な小規模農民です。畑は持っているものの灌漑設備はなく、雨期の間だけ農業をし、乾期の終わり頃には食べ物の備蓄も少なくなり、日々の食べ物にも事欠く状態になることもしばしばです。でも、土地の開墾を行い、灌漑設備を持つ共同菜園にまで成長させたのは、彼ら自身です。確かにTICOは資金を準備しましたが、実際に作業をするメンバーの存在なくしてこの菜園はできあがらなかったのです。ですがどうしても、メンバーの中に依存心が強く、TICOが身を引こうとすると自分も身を引いていってしまう傾向があります。畑もあり、水もあり、助け合う仲間もいる。あとは自信とやる気をもって協力していけば、生活を変える収入を得られる可能性がそこにあるのです。一度は崩壊しそうになった共同菜園に再び戻ってきたメンバーたちは、その可能性に気づいたのだと思います。

TICOは金銭的な支援は縮小しましたが、引き続き活動状況をモニタリングしていきます。自らの可能性に気づいたメンバーたちが、菜園をさらに発展させてくれることを期待して・・・。

病気になったら遠出をする人たちへ

ザンビア共和国 チボンボ郡

農村地域プライマリーヘルスケアプロジェクト 始動

Rural Primary Health Care Project in Momboshi Area under Chibombo District

写真上：モンボシでの月一度の乳幼児検診に来た母子

2002年にザンビアを襲った干ばつ以来、TICOが提唱してきた農村開発の考え方『WAHEパッケージ』に、保健医療分野のプロジェクトが加わるようになりました。プロジェクト開始の前に、ザンビアの農村の人たちに必要な保健サービスについて考えてみます。

『Face to Face』の読者の方なら、ザンビアの人たちが健康に暮らすことがいかに大変なことなのか、何度も耳にされていることでしょう。平均寿命が40歳に満たないことや、1,000人の赤ちゃんのうち200人が5歳の誕生日の前に死んでしまう（日本はたった4人）ことなど、数字を見ているだけでも、ザンビアは何だかとんでもなく過

酷な世界で、怖ろしい病気がまん延している所と想像してしまうかもしれません。

確かに、日本では見られないマラリアやコレラといった病気が、ザンビアでは大きな問題として残されています。しかしそれ以上に、日本人もかかるありふれた病気に、ザンビア人もまた同じようにかかっているのだということ覚えておいてほしいのです。ザンビア人も日本人と同じように、風邪をひいて咳が出るとか、頭痛いとか、子どもが熱を出すとか（発熱が全てマラリアとは限りません）、下痢をしたりします（コレラである方が少ないです）。ただ、日本より回数は多いかもしれません。



今年3月には、日本人医学生5名がモンボシを訪問し、村人の健康に関する実態調査を行いました。



飲めば治るのに薬 が手に入らない

では、日本人がこういう病気を「ありふれたもの」としてそれほど心配しなくてすむのはなぜでしょうか。病気になっても、すぐにかかれる医者がいる、近所の薬局ですぐに薬が手に入るという安心感があるからではないでしょうか。

ザンビアの農村の人たちの場合はどうでしょう。首都のルサカから100キロほど北に位置するチボンボ郡モンボシ地域は、23の村から成る、人口約7,000人の典型的な農村地域です。村人は主食のトウモロコシやわずかな野菜を育て、畑の間に点在する家に住んで、日本人の感覚からすると自給自足に近い生活を送っています。

ある日、村の子どもが熱を出したとします。この子のお母さんは、熱をさます薬がこの世にあることは知っていますので、薬を与えたいと思いました。でも、村では診療所どころか薬局もありませんから、薬は手に入りません。お母さんは様子を見るしかありませんでした。

やりたいこと1 必要最低限の薬（解熱剤・抗生物質など）は村で手に入るようにしたい

写真左：臨時で下痢の子を診察して薬を渡す筆者。この子が栄養失調だった

診療所ははるかか なた30キロ先

翌日になっても熱が下がらないので、マラリアではないかと心配になってきました。診療所に行けば、マラリアの薬もあるはず（在庫があれば）。何より診察してもらえれば、安心することができます（ヘルスセンターと呼ばれる診療所には、医師はいませんが、一定の訓練を受けた准医師・看護師が診療を行っています）。

お母さんは子どもを診療所に連れて行こうとおもいました。しかし、最寄りの診療所は30キロも離れた町までありません。日に数便の乗合自動車（ミニバス）はありますが、運賃が高くてとても払えません。お母さんは今日も家で様子を見ることにしました。

次の日になってもよくなりません。子どもは昨日よりぐったりして、元気がありません。お金を借りてミニバス代を工面して、やっと診療所で診察を受けることができました。やはりマラリアだったようで、脱水もひどく、入院することになってしまいました。

やりたいこと2 ヘルスポスト（簡易診療所）を建てて、必要最低限の診察が村で受けられるようにしたい

写真中：モンボシから診療所へとつづくメインロード。

何を食べさせれば 栄養がつくの

診察した先生からは、栄養失調もあると言われました。歳の割に体重が少ないそうです。そういえば生後1年くらいまでは、月に一度村でやっていた出張検診で体重測定をしていましたが、最近は畑が忙しくて受けていなかったのが気付きませんでした。

薬がよく効いて、何とかマラリアからは快復できました。退院のときに看護師さんから、栄養のある食べ物をもっと与えるように言われました。でも、お金もないし、どんな食べ物がいいのかわかりません。

帰宅してからは、日々の暮らしが忙しく、次また病気になったときのことはまでは考える暇もありません。

やりたいこと3 村の保健ボランティアからお母さんに、栄養や病気にならないための具体的な知識を広められるようにしたい

写真右：モンボシの子どもたち。

このお母さんと子どもが安心して健康でいられるように、2007年8月から3カ年計画でプロジェクトを実施します。TICOから医師・栄養士を派遣して、「草の根技術協力事業」としてJICA（国際協力機構）の支援を受ける予定です。（田淵幸一郎）

ルサカの首都を守る救急救助プロジェクト通信

TICO事務局 五十嵐 仁

ザンビア救急救助隊ERTからの報告

プロジェクトの警察庁側のカウンターパートであった、カチョファ主席警部が、2006年10月から6ヶ月間、徳島県の支援をいただき、徳島県と神戸市にて防災に関する研修を受けました。その後カチョファさんは、ルサカの救急救助隊に復帰してこれまでのように、隊長として救急や緊急事案の要請に対応する日々が続いているようです。



帰国後現地で勤務に励むカチョファさんの様子

現在は現地のインターネットへのアクセスが限定的であるため、少々TICO本部とのコミュニケーションができない場合もありますが、時折現地から送られてくる写真を見る限り、カチョファさんもがんばっている様子が伺われます。今後カチョファさんは時間を作り、徳島で学んだ防災行政について、ERT隊員に指導を行う予定を作っているとのこと。ただ、大きな事故などに出動する時間が長いこともあり、現在の優先事項は日本からこれまでに寄贈された救助機材などをきちんと保守管理できるようにするための、指導を隊員に行っているそうです。引き続き、カチョファさんにがんばっていただき、1人でも多くの命を救ってほしいと思います。

また、ERT隊ではアンドレア本部長の下、隊の運営をスムーズにするための寄付を募っており、ザンビアのとあるライオンズクラブが消毒剤や包帯などの消耗品をERT隊へ先日寄付したとのこと。日本などの外助が不要となる日を私たちTICOは待っていますが、ザンビアという最貧国で自助努力をもって全てを運営していくことは非常に困難です。今後ERTでは、運営母体の強化を行うため政府との関わりを強く持ち、副大統領府

危機管理局にERT隊が吸収され恒久的なステータスの下で日々の緊急事案対応を行う方法を現在模索しています。



現地ライオンズクラブから寄付を受ける
アンドレア救急本部長

ERT隊に参加し無報酬でがんばってきたボランティア隊員が今後も引き続き、ERTの「命を救う活動」に参加することにより、精神的な高揚を成し遂げてほしいと思っています。ERT隊員は、24時間、365日ルサカ市民のために要請が入れば出動をして行きます。カンボジアにも兄弟分のERT隊がTICOを通じ作られる可能性も出てきました。是非とも各国にERT隊が作られ、ネットワーク化をすることでさらに南一南協力体制も今後作られていくと夢を膨らませています。



油圧救助機材の保守をするボランティア隊員たち

救急搬送システムは、社会的な地位に問わず緊急時に医療機関へアクセスを支援する人間の安全保障を守るインフラです。TICOは今後もこの視点をアジア・アフリカで広めていきたいと思っています。

カンボジア国における支援がいよいよ始まります

その1・・・救急システム整備プロジェクト

カンボジア・もう1つの課題＝交通事故

カンボジアにおける開発課題はさまざまですが、その中でも交通事故は人々の健康を害する大きな要因となっています。2005年のデータによるとASEANの中で、カンボジアの交通事故の死亡率は、ワースト1位です。交通事故が発生し仮に家族を支える主が死亡した場合、残された家族への経済、社会、精神的負担は大きく、特に低所得者層の人たちは、移動手段として2輪バイクを使っています。事故が起されば、車に乗っている人に比べても怪我の度合いは格段に大きいと言えます。交通事故が発生しても、公共の救急搬送システムが無いことから、首都プノンペン市内であっても病院に迅速かつ適切にアクセスできないことが今年の3月に実施した調査で判明しています。TICOでは、ザンビアのルサカ市に整備した救急システムのモデルを参考に、カンボジアはプノンペン市に同様なシステムを構築するために、始動します。多くの方々からの寄付や機材の支援をお待ちしています。(五十嵐仁)



点滴をしたままバイクに乗って移動する人を発見しました！

その2・・・スラムの人々が安心して赤ちゃんを産むために

プノンペン市西部保健管内の各診療所から助産師さんたちが集り、今後の活動を左右する問題分析を実施しました。技術を持つ助産師である自分たちを診療所の強みとして挙げ、緊急時の対応に対する能力や診療所の機材が十分ではないこと、を確認しました。また、地域の中での現状として、多くの人々が妊産婦検診に参加するようになったこと、診療所での出産が増えたことが強みとして挙げられました。これは、地域の中で絶对的に不足していたお産病棟やヘルスルームの建設を実施してきたセカンドハンドの活動の成果であることを確信することができた一瞬でした。しかしながら、分娩期に遭遇する危険な兆候を妊婦さんが理解しておらず手遅れになるケースが多いことや、診療所や病院に行きたくても移動手段が確保できないこと、機材の不足などが問題として挙げられました。

現在、TICOでは、妊産婦の診察に欠かせない超音波診断装置や、まだ使用できる医療器材、救急車などの車両を探しています。また、これらの機材を輸送するために資金が必要となります。ご支援いただける方は事務局へご連絡いただけますようよろしくお願い申し上げます。

カンボジアの公務員は想像以上に厳しい給与体系を強いられています。多くの医療技術者は営利の病院や診療所でアルバイトをしなければ自分自身の生活が成り立ちません。また、経済的に裕福な人たちはプライベートの診療所で高額な診療費を支払うことができますが、都市貧困層と呼ばれる人たちは公的診療所が唯一の医療機関となっています。

このような状況の中、公立の診療所のサービスの質をいかに改善していくかが大きな課題といえます。幸いなことに、カウンターパートである西部管区保健局の局長であるソーチャット先生は貧困地区に住む人々の現状をよく理解されており、改善のために努力をされている方です。先生はボルボト時代の苦しい日々を生き抜いた経験から、人々の平和と平安のために心を砕かれていることが良くわかります。(五十嵐く)



TICOユース設立記念総会を開催しました

去る4月19日、池住義憲先生にお越しいただき、TICOユースの設立記念講演会が行われました。「途上国の貧困、誰の問題？、誰が問題？～私たちができることを考える～」をメインテーマに、約90分講演をいただきました。このテーマはTICOユースメンバーたちが話し合い、途上国でおこっている貧困は遠い世界の出来事じゃなく、自分たちの生活ともつながっているんだということを身近に感じてもらいたいと思い、決めました。

さて、突然ですが、

“貧困は〇〇〇の問題である”
上記の〇〇〇にはいる言葉はなんでしょう？

3文字とは限りませんよ！（笑）また、これが正解だ！というものはありませんので、みなさんもちょっと考えてみてください。

講演会では参加者が5、6人程度のグループにわかれ、〇〇〇に当てはまる言葉について考えました。先進国と途上国、分配、政治、経済、お金、なくさなければならぬ、世界が協力すべき、環境、教育、愛、... etcさまざまな意見が出されました。もちろん、これが正しいというものはありません。ただ、どうとらえるかによって自らの取り組み方が変わってくると先生はおっしゃいました。なお、池住先生は“暴力（構造的暴力）”という言葉が述べられていました。暴力を振るう人、振るわれる人、見てみぬふりをする人、... 自分はどこに位置するのでしょうか？自分の立場を考えてみて、その中で自分ができるところを見つけていく。“自分はどうかとらえるか”をい



つもとぎすますことが大切だということでした。

そして、もう1点。みなさんは“貧困はなくすることができる”と思いますか？真剣に考えれば考えるほど、不可能な気がしてきます。けれど、“なくすことができる”と思うかどうかでその人の行動のあり方、真剣みが変わってくるというのです。先生は、オランダのNGO、NOVIBによって提示された“貧困をなくす100の方法”の最初の項目、“無力感を克服すること”を挙げられ、あきらめないことの重要性をお話くださいました。その他、風刺画や富の分配図といったイラストから世界の

状況を考えたり、Web chartや、Structural Analysisといった分析方法も教えてくださいました。参加された皆さんは真剣に先生のお話に聞き入っていました。

1部の講演会に引き続き、2部ではより先生と具体的な話をしようと、開発教育やファシリテーターとは？などといったテーマを中心に熱い意見交換が行われました。1部、2部共にとても充実した内容で、大変勉強になりました。TICOユースの活動に興味をもってくれた学生さんもうるようでユースの今後の活動にも気合がはいります！！

最後に、講演会開催にあたり、たいへん多くの皆様のご協力をいただきました。この場をかりてTICOユース一同御礼申し上げます。ありがとうございました。今後ともTICOならびに、TICOユースの活動にご支援のほどよろしくお願いいたします。（TICOユース 関野聡美）

地球人カレッジの報告

地球人カレッジは「地球規模で考えながら地域から活動していく」をテーマに毎月1回行っている公開セミナーです。TICO活動の一環として1997年9月から始まりました。

April TICOが人を地球人と呼ぶ理由

国際医学生連盟（IFMSA）

2007年3月にザンビアで実施した「アフリカカレッジプロジェクト」について発表していただきました。全国各地から結集した医学系学生5名は、TICOの活動地を訪問し、住民の意識調査、マッピング、水質調査を行い、村人を対象に「下痢の予防と治療」に関する紙芝居を行いました。住民の意識調査の詳しい内容は次号でお伝えしたいと思います。

May 新自由主義が作る援助の光と影 ～感染症やダム開発を中心に～

黒岩由司さん（東京大学国際保健計画学・准教授）

経済優先主義の名の下にさまざまな開発が進む途上国において、我々は本当の幸せを忘れていないかを考えさせられました。また予防接種事業の裏で医療廃棄物処理が課題になっている現実などを知りました。世界の大きな流れに飲まれることなく、小さいながらもNGOとしての活動を続けていく必要性を感じました。

****イベント案内****

ヒダノ修ースーパー太鼓コンサート2007

お待たせしました！毎年恒例のヒダノ修一氏によるチャリティーコンサートが今年も四国に上陸します。

7月14日(土) 開演 15:00

徳島大学長井記念ホール(蔵本キャンパス)

支援協力金：学生2000円(当日2500円)

*本会場は学生が対象となります。

7月15日(日) 開演 14:30

吉野川市鴨島公民館

チケット：前売り3000円(当日3500円)

チケットの販売はTICO事務局、またはローソンチケット販売をご利用ください。

ローソンチケット：Lコード64750

詳細はコンサートのチラシをご覧ください。

地域活動家のためのファシリテーター養成研修

先日徳島で講演いただいた池住義憲先生による、参加型ワークショップ形式を取り入れた身につくファシリテーター研修です。このコースでは開発教育の基礎から、ファシリテーターの実践まで幅広い技能を学びます。学校の先生はもちろん、学生さん、まつづくりグループやボランティアグループのコーディネーターなどをされている方から、開発教育って何？ファシリテーターって何？という方まで、どなたにもオススメ。今までの活動により幅が広がることは間違いありません！

パート1：開発教育とファシリテーターの基礎基本

1日目 6月30日(土) 13:00-17:00 / 2日目 7月1日(日) 10:00-17:00

パート2：ファシリテーターの実践・実習

1日目 7月21日(土) 13:00-17:00 / 2日目 7月22日(日) 10:00-17:00

募集人数：30名、参加費：無料、場所：吉野川市アメニティセンター

応募方法：規定の応募用紙に必要事項を記入の上、TICO事務局までメール、または郵送でお送りください。申し込み受付が終了した段階でこちらからご連絡いたします。申し込み用紙はホームページからもダウンロードできます。質問・問い合わせはメールでお願いします。

e-mail: zikomo@nmt.ne.jp URL: http://www.tico.or.jp/

6月の地球人カレッジのご案内

ベトナム難民ラッパーからのメッセージ ～ネガティブからポジティブへ～

M.C.ナムさん

6月23日(土)13:30-15:00

場所: TOPIA(JR徳島駅ビル・クレメント6階)

ナムさんは「以前はベトナム人であることがコンプレックスだったが、ラップを通じて、ラッキーだと思えるようになった。」と言っています。ラップのライブを交え、ベトナム人であることをポジティブに捉えられるようになった経緯などについて話していただきます。ナムさんの言葉にはベトナム難民の子供としての力強さがあります。ナムさんの歌と話を聞くと、私たちは勇気づけられ、建設的に生きるヒントが得られるでしょう。

TICO広報室兼事務局が開設しました。

国際協力・国際保健・環境問題・NPO/NGO などなど多くの図書や他のNGOや国際機関の情報を取り揃えています。ザンビアの民芸品やカンボジアの手工芸品などの展示も行っております。お近くにお越しの際は是非お立ち寄りください。

新連絡先

【住所】〒779-3403

徳島県吉野川市山川町前川120-4

【電話・FAX】0883-42-2271

【携帯電話】090-7786-3193

ありがとうございました(敬称略・順不同)

★寄付をくださった方々★

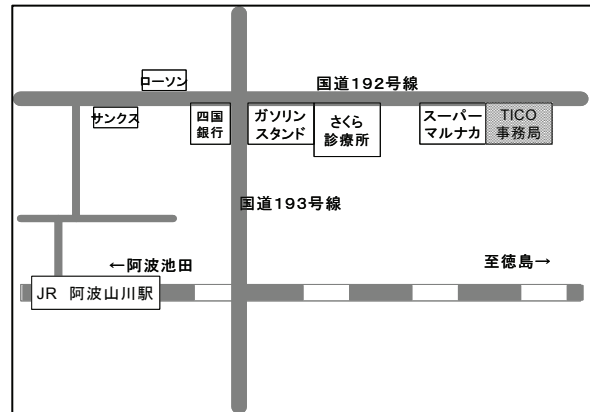
アントハウス(あおぎ)、上野壽美子、秋月益子、徳島県海外教育研究会、酒巻忠司、篠原澄江、TICO ユース、バイエル薬品(株)、寺口美香、IFMSA-JAPAN、徳島北高等学校205HR、田中純子、中西内科、田淵俊次、大倉房子、ヒラオカ薬局、唐住洲子、吉田修河合純子、山本ひとみ、住友つきみ、原田信雄、五十嵐仁

★会費を継続して払ってくださった方々★

松岡哲也、中村晃一、尾崎富美子、井形和枝、町田美佳、田尾佳代子、田所幸枝、こうざい薬局、畑和子、中村靖子、井内一志、垣原宏治、松浦和美、大滝知津枝、橋本吉之、篠原隆史、笹井美由紀、長野茂夫、常見裕之、みづほメディカル、津田道子、北島コーポレーション、秋月益子、古賀明子、大垣光治、白石吉彦、唐住洲子、田淵俊次、中村典子、高井美穂

★新たに会員になってくださった方々★

寺口カミコ、渡辺あかり、松村一義、山本ひとみ、石橋万里、桐田泰恵、酒井景子、西口三千恵、北原大翔、塩田勉、小山英毅、天満雄一、原田恵子、馬淵明子(以上は2007年4月1日から5月25日までの事務局入金分)



お詫び

Face to Face12号3ページの記事中に記載いたしました「酒井恵子さん」は、「酒井景子さん」の誤りでした。お詫び申し上げます。

【TICOへの入会方法】

会員となって資金面からTICOの活動をサポートしてくださる方を募集しています。入会ご希望の方は郵便振替用紙に所定の年会費を納入して下さい。インターネットのTICOホームページからも入会申し込みが可能です。会員の方にはTICOニュースレター『Face to Face』を毎月送付いたします。

【正会員】 12,000円

【賛助会員】 個人：12,000円 学生：6,000円
団体：15,000円

(通常は賛助会員でのご入会をお願いしています。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい)

振込先：郵便振替口座 01640-6-37649

振込先加入者名：TICO

Eメールアドレスをお知らせいただいた方にはTICOの各種イベント情報をメールにてご連絡申し上げます。

TICOの活動は皆様からの会費やご寄付によって支えられています。会費の納入がお済みでない会員の方は、納入下さいますようお願いいたします。なお、郵便口座からの「年会費自動引き落とし」もご利用いただけます。

募金のお願い

TICOの海外支援活動は皆様からの寄付金や会費により支えられています(事務局の作業軽減のため領収書は発行していません。必要な方はお申し出下さい)

郵便振替口座：01640-6-37649 振込先加入者名：TICO

四国銀行 山川支店(店番号344) 普通預金 0199692

特定非営利活動法人TICO 代表理事 吉田修(トクヒ テイコ)

TICOニュースレター Face to Face 第11号 2007年6月発行 発行人：吉田 修 編集担当：五十嵐 久美子
【TICO事務局連絡先】

〒779-3403 徳島県吉野川市山川町前川120-4 TEL/FAX：0883-42-2271

携帯電話：090-7786-3193 TICO ホームページ：http://www.tico.or.jp/ e-mail：zikomo@nmt.ne.jp